第4節　小串構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査

基幹・環境整備(煙突)新営に伴う試掘調査

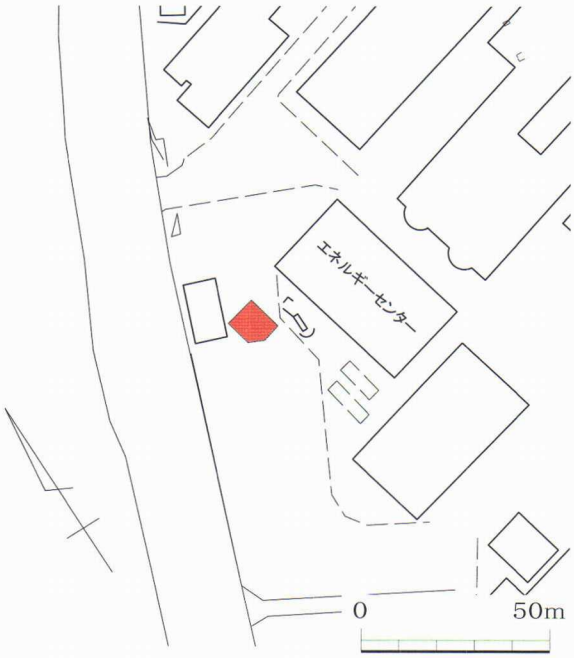

図11　調査区位置図

調査地区　小串構内エネルギーセンター棟西側、剖検棟との間の空閑地

調査面積　76㎡

調査期間　平成15年8月1日 ー 8月20日

調査担当　横山成己

調査結果

(1)調査の経過(図11、写真5)

小串構内エネルギーセンター棟の既設煙突の老朽化に伴い、煙突の新営が計画された。新営煙突は地下2.8mにおよぶ基礎掘削工事を伴う計画であった。この計画地周辺の埋蔵文化財の状況としては、北東方向に近接する地点で昭和59年に資料館により実施された医学部環境整備に伴う試掘調査では、古代から近世にかけての遺物が含まれる堆積層が確認されている[註1]が、同年南方向に近接する地点で実施された医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営に伴う試掘調査では埋蔵文化財は確認されなかった[註2]。したがって計画地点での埋蔵文化財の有無は不明確な状況と言わざるを得ず、埋蔵文化財資料館運営委員会の判断に基づき、文化財保護法の下に試掘調査を行うこととなった。

新営煙突の基礎平面形態は正八角形であり、工事計画も八角形の範囲で掘削を行うとのことであったが、埋蔵文化財調査においては直線的に土層断面を確認する方法がより有効であるため、1辺を9mとする正方形を基本的な調査範囲として設定した。しかしながら、調査区の南西部に関しては、隣地との境界塀が存在するために、調査の安全上掘削範囲を縮小させた。したがって、調査区の平面形は五角形を呈している。

(2)基本層序(図12・写真6～8)

調査の結果確認された基本層序は、調査区北側壁面で述べると、

第1層…鉱滓(約25cm)

第2～6層…造成土(約175cm)

第7層…ボタ土(約15cm)

第8層…緑灰色(7.5GY6/1)粘性砂(約40cm)

である。第8層に関しては土質が脆弱であったため、現地表下2.2m(標高0.3m)まで掘削したところで調査の安全上掘削を中止した。部分的にさらに約1m掘り下げたが、土質に変化は見られなかった。

(3)遺構および遺物

遺構は検出されなかった。遺物としては、第8層から自然木とともに土師器の小片2点が出土している。いずれも1cm以下の破片であり、器種および時期は不明である。

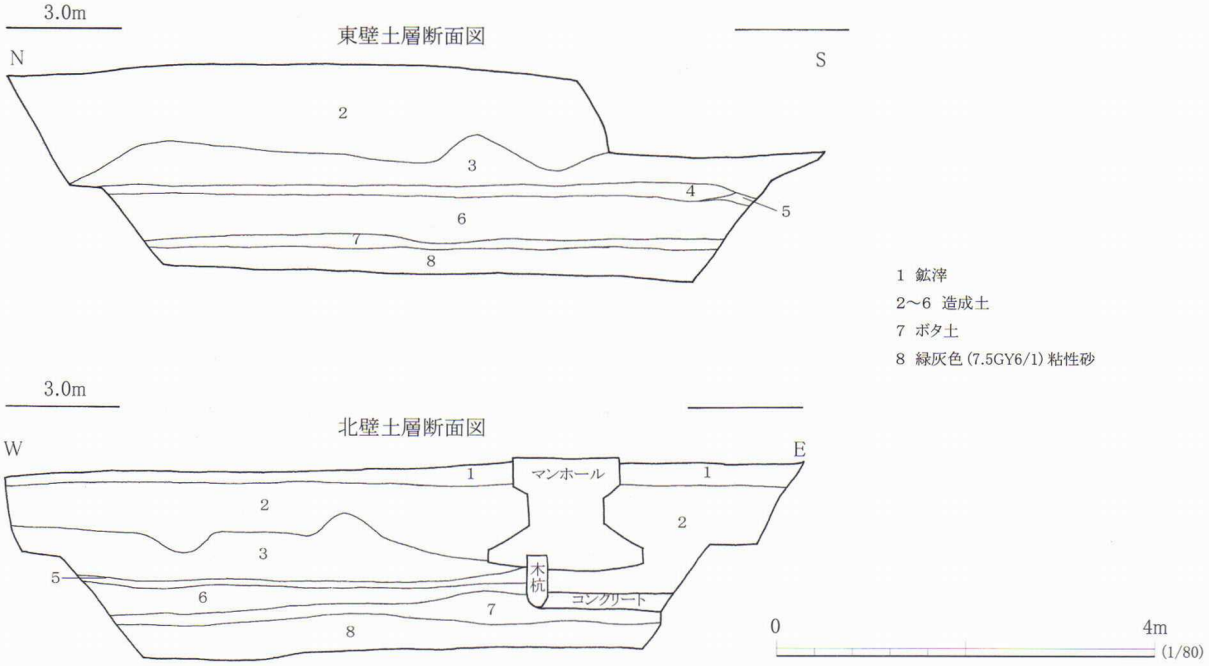

図 12 調査区土層断面図

写真 5 調査前全景（南東から）

写真 6 調査区全景（東から）

写真 7 調査区東壁土層断面（西から）

写真 8 調査区北壁土層断面（南から）

(4)小結

今回の調査では、医学部の旧霊安室の基礎と考えられる木杭が17本検出されたことを除いては、遺構の確認はできなかった。基本層序第7層までは無遺物層であったが、第8層からは自然木などの植物遺体とともに、極少量ではあるが土師器の小片が出土している。小片であるためこれらの遺物の器種・所属時期に関しては推定できないが、植物遺体とともに砂中に混入している状況から見て、小串構内北方の低丘陵付近からの流入であろうか。

今回の調査以前には、小串構内西部における発掘調査例は少なく、近接地の調査としては前述したように昭和59年に実施された医学部基幹整備に伴う試掘調査、医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営に伴う試掘調査があるにすぎない。その調査では、本調査の基本層序第8層(緑灰色粘性砂)と同一層と推測される土層(基幹整備Aトレンチ調査における灰色粘土混じり砂、臨床講義棟・病理解剖棟調査における青灰色混砂粘質土(植物遺体含む))が確認されている。いずれも層上面の標高がほぼ0.7mで一致していることから、同一層と見て問題ないようである。また、昭和59年の調査では、この層中から汽水性の巻貝、二枚貝が検出されている。以上の状況から見ると、小串構内の西部に関しては過去において河口付近の海岸域であった可能性が極めて高い。

現在山口大学小串構内は、宇部市域を南北に流れる真締川の右岸に面して所在している。この真締川は、古くは小串構内の南端部、樋ノ口橋で流れを西に向け、助田町(現JR居能駅南側)付近を河口としていたようである。「舟木宰判本控」に所収されている未ノ二月(寛政11年(1799)2月)の「御届申上候事」には、「宇部村福富前殿領本川筋砂余分流出、川尻は遠干拓にて砂引不申、次第ニ川内高相成、洪水之筋は勿論地道ニても川筋の田地余分水損有之、年々御所務落猶百姓迷惑不大形儀ニ付、川尻を床海之所に付替被申付度、ー」と記されている。本川(真締川)が上流から運んできた土砂で河口が埋まってしまい、洪水被害が大きいので、河口を付け替えさせてほしいという内容である。また、同文書中には、河口付け替え工事の結果、「ー弥水砂共ニ引宜ニ付、只今迄之川をは川尻留被申附候、ー」とあり、付け替え工事によって川の流れが良くなったので旧河口を封鎖して耕地にしたいと萩藩に願い出ている[註3]。

現在の樋ノ口橋から助田町までの直線距離はおよそ2kmであり、河口からの洪水被害がどの程度の範囲に広がりを見せていたのかという問題は、現状では周辺域の発掘調査例が少ないため当時の旧地形の復元は困難である。少なくとも小串構内の南西部に関しては18世紀以前は陸上生活地ではなかった可能性が高いと言えるのではなかろうか。

しかしながら、密度は希薄であるが遺物を包含する土層が確認されるため、小串構内北方の丘陵地には集落遺跡が存在する可能性が残っている。埋蔵文化財確認調査の継続は不可欠であろう。

[註]

1)森田孝一(1986)「第4章　宇部(小串構内)医学部基幹整備に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』,山口

2)森田孝一(1986)「第5章　宇部(小串構内)医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』,山口

3)小川国治(1992)「第4編近世第3章近世村落の成立と発展」,宇部市史編集委員会(編)『宇部市史通史篇』上巻,宇部(山口)